令和 3 年度 課程博士学位申請論文要旨

中学校美術科における「日本絵画」教育の研究

東京藝術大学大学院 美術研究科 芸術学研究領域
美術教育 1319929 新川美湖

本研究の目的は、中学校美術科における「日本絵画」に関わる教育の変遷と現状を明らかにし、同科におけるこれからの日本絵画学習の望ましい在り方を探究することにある。なお本論文では、墨や和紙、岩絵の具といった伝統的な画材を中心として描かれた作品全体を指す時には「日本絵画」とし、明治時代中期以降に描かれ、岩絵の具等を多用した近代日本絵画のみを指すときには「日本画」として論を進めていく。

これまで筆者は、日本画制作の実技研究と美術教育の理論研究、および教育実践に携わってきた。その中で日本画を水墨画や浮世絵と混同して理解される例が極めて多く、西洋絵画と比較したときに、日本絵画に対する理解が十分に得られていないと強く感じてきた。一方、学校教育における美術教育では、2008 年度の学習指導要領の改訂以降、「美術文化の継承と創造への関心を高める」という姿勢が重視されてきた。そして図画工作科・美術科の教科書では、日本絵画の「鑑賞」に関わる図版が多く掲載されるようになり、さらに水墨画をはじめとする「表現」教育の題材も必ず取り上げられるようになった。とくに「表現」教育においては、2018 年に筆者が行った学習履歴アンケート調査で、東京近郊の小学生の 6~7 割が墨を使用した「表現」教育を受けていることが明らかとなった。これは 10 年前の小学生に相当する、同年の大学生を対象としたアンケート調査と比較しても急増しており、この 10 年間で日本絵画に関わる教育が、図画工作科・美術科において急速に浸透しつつあることが確認できた。

しかしこれまでの先行研究では、日本絵画に関わる教育の実態を、包括的に捉えようとする調査研究は管見の限り見られない。また美術科教育の歴史についての研究は充実しているものの、近年の日本絵画教育の動向を捉えることができるような、日本絵画に焦点化した歴史研究が十分に行われているとは言い難い。さらに「表現」教育の指導法については、日本画の実技研究を行ってきた筆者にとっても、有効な指導方法や使用画材において不透明な部分が多く、教育現場の実態を明らかにしながら、筆者自身の制作研究も加えて探究していく必要があると感じられた。

そこで本論文では、中学美術科を中心とする日本絵画教育の変遷を追いながら、現職教

員を対象としたアンケート調査により、日本絵画教育の現状と課題を明らかにする。さらに筆者自身による、中学校美術科における日本絵画を題材とした教育実践と詳察を踏まえ、今後の教育の充実のために、望ましい学習の在り方や支援の在り方について考察する。

これからの時代を生きる子供達にとって、日本絵画に関わる学習の内容が、単に自国文化を称賛するだけのものであってはならない。グローバル社会を生きる世代にとって必要とされるのは、自国の文化を理解し、自信をもって発信しながら、同時に異文化を理解し対話していくことができる力である。本研究は、そうした子供達の育成の一助となることを目指していく。

本論文は次のように構成する。

第 1 章では、とくに 2008 年以降の学習指導要領に見られる変化に着目しながら、学習指導要領と、小学校図画工作科教科書及び中学校美術科教科書の内容をもとに、戦後の日本絵画に関わる教育内容を分析する。とくに年代別掲載量の推移や重視された学習内容の変遷、その背景を調査することで、現在の教育につながる視点を捉えていく。

第 2 章では、近年図画工作科・美術科で取り組まれている水墨を中心とする日本絵画の「表現」教育について検討するために、戦前の学校教育で取り組まれていた「毛筆画」教育に遡り、指導方法で現在と教育的視点が異なることに留意しながら、比較検討していく。とくに当時の教科書と共に教師用指導書を分析することで、墨や筆を用いる表現のための指導法や使用画材について考察していく。

第 3 章では、中学校美術科の現職教員、および小学校高学年担当の全科教員を対象としたアンケート調査の結果を参照にしながら、図画工作科・美術科における日本絵画教育の現状と課題を明らかにしていく。

第 4 章では、これまでの調査に基づく、筆者自身による中学校美術科における実践研究を行い、その有効性や今後の発展性について考察する。

終章では第 1・2 章の歴史的考察と、第 3・4 章の実態調査・実践研究から得られた考察をまとめ、これからの中学校美術科にもとめられる日本絵画に関わる教育や支援の在り方について、結論を述べる。